

どう進めるの 学習評価 —授業実践と評価の工夫②—

回答・玉川大学教職サポートルーム客員教授 峯岸 誠



歴史的分野の授業で「思考・判断・表現」はどのように評価すればよいでしょうか。

A 歴史的分野の授業は、事実やできごとなどの歴史的事象が明らかであるために評価が「知識・理解」に偏りがちです。それでは、「思考・判断・表現」の観点の評価をどのようにしたらよいでしょうか。

帝国書院『社会科 中学生の歴史』（以下、教科書）と国立教育政策研究所の「**評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校社会】**」（以下、「参考資料」）を使って「思考・判断・表現」の評価について考えてみましょう。教科書の第4部「3章 武士による支配の完成」の「1 幕藩体制の始まり」（教科書p.96～97）を例にします。

この章の目標は「江戸幕府の成立と大名統制、鎖国政策、身分制度の確立及び農村の様子、鎖国下の対外関係などを通して、江戸幕府の政治の特色を考えさせ、幕府と藩による支配が確立したことを理解させる。」であり、「思考・判断・表現」の評価規準は「江戸幕府の成立と大名統制、鎖国政策、身分制度の確立及び農村の様子、鎖国下の対外関係や江戸幕府の政治の特色について多面的・多角的に考察し、公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。」と「参考資料」（p.34、35）は示しています。これをもとに本時「幕藩体制の始まり」の評価規準を次のように設定します。

「おもな大名の配置」や「徳川氏の系図」、「武家諸法度」、「鳥取藩の参勤交代」などの資料から江戸幕府の政治について幕府と藩の関係を多面的・多角的に考察し、公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。

なお、この授業では「なぜ、徳川氏は約260年にわたって全国を支配できたのだろうか」という学習目標を提示します。ここでは、教科書p.96小項目「江戸時代の幕あけ」の部分で、教科書p.53の「源氏と北条氏の系図」とp.97「徳川氏の系図」を比較させ、「徳川氏はなぜ十五代も続いたのか」のように学習課題を具体的な形にする工夫も必要です。

ついで、教科書p.96～97小項目「江戸幕府のしくみ」の本文とp.96の「おもな大名の配置」から次のようなことを読み取らせませす。

- ① 大名には3つの種類がある。
- ② 石高の大きな大名は江戸から遠隔地に多い。
- ③ 外様大名は江戸から遠隔地に配置されている。
- ④ 親藩・譜代大名も江戸から遠隔地に配置されている。
- ⑤ 主要都市や鉱山は幕府が直接支配している。
- ⑥ 幕府は貨幣発行権や貿易を独占している。

この①～⑥は「技能」の評価基準ともなります。

これらが出そろったところで学習目標である「なぜ、徳川氏は約260年にわたって全国を支配できたのだろうか」について、幕府と藩の關係に着目させて指導します。最初は4人程度の少人数のグループで意見交換をさせましょう。ついで、そこで得た知見も参考にさせて自分の考えを記述させましょう。

そこでは、次のような記述が想定されます。

- ① 九州のように多くの外様大名のなかにわずかに譜代大名が配置されている。これは、幕府の監視役ではないか。
- ② 大きな大名は伊達氏、前田氏、島津氏のように外様大名に多く、しかも江戸の遠隔地に配置されている。これは幕府を攻撃しないようにしてい

るのではないか。

③ 幕府は、主要都市や鉱山を直接支配したり、貨幣発行権や貿易を独占したりしている。これにより、財政を確保したのではないか。

これらの記述は、前半で考察と判断の根拠を示し、後半で考察の結果を表現しています。自分の考えを記述させるときに、「考察や判断の根拠を示す」、「結果を自分の言葉で記述する」などの指示が必要です。また、考察や判断をさせる場合には、「おもな大名の配置」や「徳川氏の系図」のように具体的な資料を与える必要があります。そして、資料を読み取らせ、資料を活用させ、考察・判断させ、自分の言葉で表現させるという段階を踏んだ指導が必要です。また、その指導にあたっては「譜代大名は将軍家とどんな関係だったのか

な」とか「江戸からの距離はどうか」というように考察の視点や判断のよりどころを示すことも大切です。

授業のまとめは、教科書p.97の小項目「大名や朝廷の統制」本文と「武家諸法度」を用いて、幕府が大名と朝廷を制度的にどのように支配したかをまとめさせましょう。最後に大名統制の一つの手段であった「鳥取藩の参勤交代」を用いて、「なぜ、徳川氏は約260年にわたって全国を支配できたのだろうか」という課題への考えを記述させましょう。

このように記述させることにより、教師が「思考・判断・表現」の評価を行うことが可能になります。この場合、ワークシートではなく、ノートを活用する工夫も大切です。



観点別評価の4つの観点の相互関係はどのようになっているのですが。

A 現在の目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）は平成元（1989）年改訂の学習指導要領に対応した評価として導入されました。このとき、観点の最初に「関心・意欲・態度」、それまでは初めに置かれていた「知識・理解」が最後に示され、「新しい学力観」とも呼ばれました。また、知識偏重の学習指導への警鐘であるなどの評論もみられました。

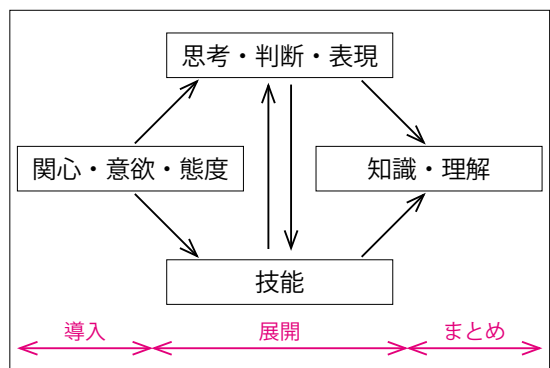
ところで社会科の観点は「社会的事象への関心・意欲・態度」、「社会的な思考・判断・表現」、「資料活用の技能」、「社会的事象についての知識・理解」です。各々の定義は「参考資料」のp.4、5に示されています。

この観点の相互の関係はどのようになっているのでしょうか。平成元（1989）年改訂の学習指導要領に対応した評価について文部省（当時）に設置された協力者会議の主査の奥田真丈氏は次のように述べています。

『「関心・意欲・態度」は学習の入口であり、それに支えられながら調べたり、探したりするのに必要な学習能力が『思考・判断』であり、その成果として身につけるのが『技能』であり『知識・理解』である。つまり、評価の4つの観点は学習

活動を構成する4つの側面であり、能力である。』

これと「参考資料」に示されている定義を考え合わせると次の図のようになります。



この図でわかるように観点の配置は、学習のプロセスを示しています。つまり、導入が「関心・意欲・態度」、学習の中心である展開が「思考・判断・表現」、「技能」、まとめが「知識・理解」になります。

この関係を踏まえると指導・評価計画や本時の学習指導案のなかで観点をどのように配置すればよいかを理解できるでしょう。つまり、毎時間4つの観点で評価するのではなく、学習のプロセスに応じて観点を絞りこむ必要があります。